
彼の者の眸は何を見るか 第一話 『霽月の趣』

樹村数奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の者の眸は何を見るか 第一話 『霽月の趣』

【Nコード】

N4860Z

【作者名】

樹村数奇

【あらすじ】

雨堂さんは未来が視えるのですか？——未来視の異才を有する雨堂戒人が同じく異才を有する者たちと繰り広げる物語『彼の者の眸は何を見るか』、第一話。巷を騒がす連続殺人の現場には、秋祭りに並んだ露店の品々が残されていた。「海藻男」雨堂戒人、「雑草女」九絵ソラは、各々、別の思惑を持って事件に向き合う。人外の者たちは、その眸に何を見るのか。

※是非とも縦書きでお楽しみください。

霽月の趣（前書き）

この物語はフィクションであり、登場する人物・団体などの名称は全て架空のものです。

霽月の趣

夜陰に、赤い光が差す。

秋祭りである。

朝から降っていた雨はすっかり上がったようだった。

境内に至る石階段を背に人を待っている。顔を合わせるのも久方振りであるから、共に祭へ繰り出すなど幾年振りだろうか、そつと背後を見上げた。

祭の様子を直接窺うことは出来ない。けれども階段を上った先、鳥居の向こうから明かりが洩れいている。声が溢れている。それらはこれ以上ない誘惑であった。

視線を戻す。待ち人は未だ現れない。手持無沙汰になって浴衣を少し直す。ただ、余り弄ると余計に着崩れそうであったから、それも程々にしておいた。

少しなら——良いだろうか。

再び振り返る。

背に届く祭の喧騒が、こちらを呼んでいるように思えたのだ。おいで、おいでと、唄っているように聞こえるのである。

一步、石段を上ってみた。草履の裏が階きざはしと擦れて、ざりと音を立てる。踏み付けた小石の摩擦感は心地良く、二歩三步と足は階段を上って行く。本来であれば待ち人と共に見る筈であった光景を、自分は今、ひとりで覗うしろめたこうとしている。それは何やら、こそりと摘み食いをするようで、愉うしろめたしい背徳さがあった。

果たして、石階段の先にそれはあった。

煌々と眩しく、がやがやと騒がしい——懐かしい祭の風景。境内の燈籠は赤々と燃え、整然と並んだ露店は喧騒と熱気に埋もれていた。歓喜と幸福の光景が、嘗て幼い胸を躍らせた景色が、一つの生命体となって熱く脈動していた。

息が少し上がるような心地であった。赤橙色に燃える視界に、暫

しの間、心奪われていた。

けれども――。

炎の中に一点、闇が差した。

祭の焰に切り裂かれ、掻き分けられた夜の暗闇が忍び込んだようだった。

少年がひとり、こちらへ歩いて来る。

黒の浴衣に黒漆の下駄――けれども鼻緒は鮮やかな琥珀色で、それは彼の眸の色と揃いであった。

愉しげな祭の有様から離れなかった視線が、今は彼の歩みに縫い止められている。一陣、柔らかに吹いた秋の夜風が、彼の癖っぽい黒髪を揺らした。提灯の明かりに、彼の白い頬が照っている。

ふと、目が合った。

からり、からり。

喧騒のうねりの中、それでも彼の下駄の音は美しくも軽快に耳朶を打った。

蜜のような琥珀色の双眸――その色は境内の赤い炎にも侵されることなく、それこそ自ら光を放っているかのようにであった。

合っていた視線が、再び離れる。

黒衣の少年は傍らを過ぎて、石階段を下って行った。

次第に遠くなる下駄の音を聞きながら、祭は始まったばかりだと云うのにもう帰ってしまうのだろうか、そんなことを考えた。

朦朧と夜空を仰ぐ。雲はない。

月影もまた然りである。

そこで不思議に合点が行った。

彼こそが――あの蜜のような双眼こそが今宵の月であったのだと、去ってしまった少年を思う。

漆黒の夜気を纏った艶やかな二つの琥珀石――その持ち主は、振り返った先にはもう、いなかった。

待ち人はまだ来ない。

序

【序】

雨音が響いている。雨粒がガラス窓を叩いている。

薄^{うす}い昼^{ぐら}下がり——これでは紅^{もみじ}葉も散ってしまうだろうか、考^{うどうかい}えるでもなくそんなことを思った。

雨堂^{うどうかい}戒人は黒革のソファ^{うどうかい}ーに深く腰掛け、ぼうと時間を潰していた。傍らに新聞紙を投げ出す。世間は連続殺人だの死体遺棄だの贈収賄事件だのと話題に事欠かぬらしい。

眼前の机には、一杯の珈琲と菓子^{うどうかい}のオブジェが並んで置かれている。菓子^{うどうかい}のオブジェとは云っても、建材はマシユマロとウエハースのみで、ただそれらをそれぞれの層が交互になるよう積み上げただけの作品であるから、何処か中途半端な印象である。雨堂はそれを、今度は上からひとつずつ摘まんでは、徐々にオブジェの丈を減じて行った。——詰まるところ、戯れなのである。

事務所に主はいなかった。別段彼女に用があった訳ではないが、誰と話すでもなくひとりで、ただ積み上げたマシユマロを食している様は流石に幾らか間抜けではないだろうか、雨堂は物憂げな視線を室内に巡らせた。

『木野崎ビル』と名の付いた雑居ビルの一室は小奇麗に片付いていた。バインダーがずらりと並んだ書類棚も、接客用の机及び二脚のソファ^{うどうかい}ーも、所長用のデスクも——どれもこれも書類だの何だので埋もれていたのを雨堂が掃除、整頓したのである。散らかすことに関して稀有な才能を有する事務所の主は、片付ける方面については無能甚だしく、またそもそも彼女にやる気がまるでないため、結果、事務所の掃除は雨堂の役目となっていた。

綺麗に整頓された室内ではあるが、果たしていつまでもつことやら——短く嘆息し、雨堂は珈琲を啜った。

そんな時である。

戸の向こうで硬い音がした。傘立てに傘を入れる音であろう。

「いやいや、本降りになって来ましたねーって、あれれ。雨堂さん、来てたんですか？」

雨堂は視線で返事をし、マシユマロを頬張った。

戸を開けて入って来たのはひとりの少女で、防寒のためかセーラー服の上にジャージを羽織っている。所々濡れている辺り、どうやら慥かに、雨脚は幾らか強まったらしい。雨堂が事務所を訪れた時には、傘を差してさえいれば身体が濡れるようなことはない程度のささやかな雨量であったのだが――雨音を聞いているだけでは強まった雨の気配を察することは出来なかったようだ。

少女は雨堂の向かいに座ると、軽妙な動作でマシユマロを一つ摘まんだ。

「いただきます」

「こら」

「まあまあ雨堂さん、怒らない怒らない。苛々し過ぎると寿命縮みますよ？ あれ、これ――この間と違うマシユマロですか？ 何だか、やあらかいですね」

少女――九絵^{このえ}ソラはすかさず二つ目を手に取った。

「それにしても駄目っすねー」

ソラはショートボブに整えた黒髪を弄りながら顔を顰める。

「癖っ毛は雨の日はどうも……んー、でも雨堂さんは何だか普段通りですね。雨堂さん的にはどうなんですか？ その頭」

「――別に」

「何か冷たいすねー。この間癖っ毛同盟結んだじゃないですか。でもまあ、雨堂さんの癖っ毛は何だかオサレパーマって感じですね。それに比べて私のは――」

「おまえのはまるで雑草だな」

「ぎッ、ってそれ酷くないすかッ？」

「うるさい。声が大きいぞ、雑草女」

雨堂はソラへ呆れたような半眼を向けた。

慥かに、雨堂とソラは黒髪の癖毛であると云う点では共通しているとも云えるが、各々の印象はかなり違っている。雨堂の髪が「曲がっている、巻いている」と云う印象であるのに対して、ソラの髪は「ハネている」と云った風で――雨堂の方が随分と小洒落て見えるのである。ただ、ソラの髪は雨堂のそれよりも艶々と細く麗しく、それ故、何処か雑然とした癖毛であることは彼女が己を飾る上で大きな枷となっていると、それは雨堂から見ても明らかであった。ソラが髪型をショートボブに整えているのも、伸ばすと收拾が付かなくなるためなのだと云う。

「わ、私のが雑草なら、雨堂さんのは海藻じゃないすか!」

ソラは愛らしい顔立ちを反撃の色に染める。けれども――

「いいぜ、それでいこう。オレは海藻、おまえは雑草。お互い納得だ」

雨堂は動じず、ウエハースに手を付けた。ソラも負けじとウエハースを両手に一枚ずつ取る。何やらおかしいところで張り合う奴だと雨堂が薄く苦笑すると、ソラはそれを嘲笑と受け取ったのか、墨で引いたような美しい眉をぐっと歪めた。二重瞼の下で、大きく黒い虹彩に囲まれた眸が悔しげに光る。

「な、納得じゃありません。雑草は流石に駄目です。何かこう、ないんすか。もうちょっとアレな、ね?」

ソラは「アレ」の内容を表現したいのか、彼女なりに工夫したつもりなのだろう身振り手振りを様々に交えたが、どうにも理解不能意味不明である。新手の呪いでも掛けられているのではないかと、雨堂は割と真面目に訝った。

「あーあ。もういいや。結局、雨堂さんは勝ち組癖っ毛ってことですよね。海藻サラダと雑草サラダじゃあ、比べるまでもないですよねえ。――いいなあ、オサレだなあ、海藻」

先程までこちらを揶揄するために用いていた「海藻」と云う言葉を、今度は羨望の声色で呟く様は滑稽であったが、また珍妙な呪いでも掛けられては敵わぬので、笑うのは止しておいた。

ソラは何やら思案顔で立ち上がると、事務所の奥の扉を潜って姿を消した。喉が渴いたのだろう。奥の部屋には簡単な台所があって、冷蔵庫には何かと飲み物が揃っている。

それにしても——九絵ソラは変な女だ。雨堂は窓の外に目を遣りながら思った。すると途端、雨脚は猛烈に激しくなり、窓ガラスはびたびたと濡れて、外の景色は飛び散る水滴に紛れてしまった。ただ景色と云っても、面白味のない雑居ビルが立ち並んでいるだけであるから、それが隠れてしまったところで別段どうと云うこともない。ばたばたと喧しくなった雨音の向こうで「あらら、おっかしいなあ」と間の抜けた声がした。

ヘンテコな女だ。再び思った。

言葉遣いは妙に馴れ馴れしい反面、声音は澄んで耳に心地良く、粗雑さや下品さは感じられない。それどころか、種々の所作——たと譬えばマシユマロを摘まむ指の具合だの、髪を弄る仕草だのである——と相俟って、何処か上品な印象さえ感じさせるのであった。あの軽い口調さえなければ、良家の娘と云われたところで疑わぬだろう。家柄と雑草頭は関係ないだろうからな、と雨堂はそこまで考えて胸中で笑う。

けれども普段の彼女は今と変わらず剽軽で、それが端々に見受けられる妙にたお嫺やかな仕草とどうしても釣り合わぬものだから——変な女だ、と雨堂は九絵ソラを見る度思ってしまうのである。

指先で珈琲カップを弄びながら、漫然とそのようなことを考えていると、「雨堂さーん」と呼ぶ声がした。困ったような、拗ねたような調子である。

「何だー？」

「私のサイダー知りませんかあ？」

云いながら、ソラが奥から戻って来た。

「蜂蜜で甘みを出したプレミアムなサイダーなんすよ。オレンジ色のラベルの——知りません？」

それなら——。

「宵子が飲んでたな、慥か」

宵子、とは事務所の主の名である。

「え、ええーッ？ そりゃないですよ……。あれ、期間限定でもう売ってないのに」

「事務所の冷蔵庫なんて一番危ないところだろ。そんなところに置いておくおまえが悪い」

「仕事中にキュッとやろうと思ってたんですよ。あーあ、ちゃんと名前シールも貼っておいたのになあ」

ソラはしょぼくれた様子で再び奥に行くと、サイダーの代わりに炭酸水のボトルを取って来た。味も香りも付いていない炭酸水の何が美味いのか分からないが、他人の嗜好に口を出すこともない。ただ、向かいに座ってボトルに口を付けたソラもそれ程美味そうに飲んでる訳ではなく、だから、矢張り進んで飲むようなものではないなと思った。

「ところで――雨堂さんも宵子さんに呼ばれて来たんすか？」

「ん？」

「いやあ、そうすか。私もお仕事の話があるって呼ばれたんですが、今回の仕事は雨堂さんと一緒かあ。初めての共同作業――何か、照れるすね？」

ソラは「いひひ」と笑い、炭酸水を口に含んだ。

「おいおい待て待て。ひとりで話を進めるな。オレは別にあいつに呼ばれて来た訳じゃない」

「あれ？　じゃ、どうしてここに？」

「これだよ、これ」

雨堂は漸く半分程丈を減じたオブジェを指した。

「マシユマロ……」

「これも」

「ウエハース」

「そう。これ、宵子が買った奴なんだ。あいつ考えなしに買い込んだ癖に、早々に飽きてほっぴり出したんだぜ？　それが、もうすぐ

期限切れだから――」

「雨堂さんが処理しに来たと」

「そ。捨てる訳にもいかないだろ」

雨堂は半ば慄然^{ぶぜん}として、続け様に二つ、マシユマロを口へ放り込んだ。

「じゃあさっき私がマシユマロ摘まんだ時、どうして怒ったんすか」

「あのなあ。幾ら余りものだからって、他人のもの食う時は一言断れ」

「ああ、そすね。――すみませんでした」

ソラは頭を下げるついでに、ウエハースを掠め取った。隙のない娘である。雨堂はもう何も云わなかった。

「それにしても――初めての共同作業は繰り越しかあ」

「繰り越さない。未来永劫、そんな機会はない」

雨堂が取り付く島もなく云うと、ソラは「またまたあ」と微笑んだ。

――本当におかしな女だ。

小さく溜息を吐く。

「さて――」

付き合い切れないと云わんばかりに、雨堂は傍らに置いた上着を掴んで立ち上がった。「あれ、もうお帰りですか」と云うソラの声に応えるように、それを白いシャツの上に羽織る。

比翼仕立て、ダブルのチェスターコートである。シックな印象が強くなりがちなチェスターコートはある程度年を重ねた者向けであることが多いが、淡い灰色をした柔らかなメルトン生地のは、全体的に細身に仕上げられていて、齢十七の雨堂にもよく似合っていた。

雨堂はリジッドジーンズに包まれた脚をぐんと伸ばした。けれどもブーツの先が机に当たって、それを慌てて引っ込める。先日求めたばかりの、明るい茶色をしたサイドゴアブーツである。ブロークが美しい。

「そのタワー、残りはやる」

雨堂はオブジェの残骸を指差した。

「あ、どうもです」

ソラは敬礼だか何だか分からぬいい加減な格好で礼を述べた。

「本当に、もう帰っちゃうんですか？」

「ん？ ああ、マシユマロは思ったより腹が膨れる」

「もうちと、お話して行きませんか？ 宵子さん、まだ来ないみたいですし——ほら、ひとりぼっちって何だか寂しいって云うか、間拔けて云うか。ね？」

雨堂はその言葉には答えず、珈琲がひと口残ったカップを奥の流しで洗い、そそくさと室外に続く戸へと向かった。

引き止められると余計に帰りたくなってしまふ自分は、どうにも天邪鬼だと雨堂はドアノブに手を掛けて思う。或いはそれは、より強く引き止めて欲しい気持ちの裏返しなのだろうか。ならばそれは、宛ら親の気を引きたいばかりに悪戯をする子供のようで——十七歳の自分に当て嵌めてみると、酷く気色が悪かった。

「——雨堂さん」

声が掛かる。

「ん？」

自分に知らしめるような気持ちで振り返った。

「えと——お疲れ様でした」

ソラは白い歯を見せて笑った。未だ雨音の響く室内であったが、彼女の周りだけはすっきりと晴れ渡ったように見えた。何気なく、彼女の名前にはそう云った意味や願いが込められているのかもしれないと思った。空——と聞いて、真っ先に雨天や曇天を思い浮かべる者などいないだろうから。

雨堂は「うん」だか「ああ」だか判別の付かぬ曖昧な返事をして事務所を辞した。

階を二つ下って、ビルのエントランスに至る。雨脚はやや勢いを失ったようであったが、それでも十分な量の水滴がアスファルトを

叩いていた。

雨堂は慣れた手付きで蝙蝠を開くと、木野崎ビルを出た。

濡れたアスファルトが水音を立て、それがブーツのソールが響かせる堅い足音と合わさる。

ああ、雨だな、と思った。

雨堂は意識的に歩みを速め、立ち込める雨煙の中へとその身を放り込むように、街を行った。

【一】

※

黒が似合うと云われたことがある。色が白いからだろうか。慥か、小学六年生の頃だった筈だ。けれども、黒ばかり着ていてはまるで死神のようで――だから、黒い服は余り持たないようにしている。

ただ、今身に纏っている浴衣は紛うことなき黒色で、宵闇との境が分からなくなってしまうそうだった。足元で涼しい音を立てる下駄も黒い漆塗りのものである。

初秋の風が柔らかに抜けて行く。耳には祭囃子が届いていた。

秋祭りに赴いたのは気紛れであった。男一人、綿飴を齧る姿はとうにも色気のないものだったが、かと云って色気のある知り合いがいる訳でもない。屋台の親爺が「あんちゃん、ひとりかい？」と可笑しそうな顔をするので、早々と祭を切り上げて来た。ひとり、ぶらりと帰途に行く。

時間帯は半端であるらしい。祭へ向かう者、祭りから帰る者――どちらの影もない。夜道はしんと静まり返っていた。

さて――と、歩む足を止めずに思案する。これからどうしたものか。自宅に戻っても良かったが、時間は未だ宵の口であるから、と駅前の方へと足を向けた。

暫く行った時である。――ああ、飛び降りたのだな、と思った。

それは何気なくだったのだ。

癖か、それとも病か。

駅前を通り過ぎ、再び人気のない一帯へと差し掛かった時のこと。

別段、切っ掛けはなかった。雑居ビルが立ち並ぶその一角、日が落ちてから歩き回るような場所ではない。

眼球の裏に力を込めるように視界を揺らした。

眼前、浮かび上がったのは——アスファルトに横たわる少女の遺骸であった。

淡い橙色の浴衣、祭へ繰り出すため丁寧に結ったのであろう髪は崩れ、割れた頭部の内容物と混じってひしゃげた両腕を汚していた。ずっと視線を上げる。

六階建てのビル——『敷島ビル』とエントランスには銘打たれていた——は何事もなかったかのように佇んでいる。事実、未だ何事もないのだ。

祭囃子はもう届かない。

響くのは、電車や自動車の通過音ばかりである。

けれども——人の声が微かに聞こえる。耳を^{そはだ}敬てる——男女が複数人、何やら愉しげに話をしている。

屋上か。

上に向けた視線を維持したまま、また眼球の裏に力を込める。

光を失った眸をこちらに向けて落下してくる少女。落下速度に髪が^{なび}靡く。彼女は先程転がっていた地点に寸分の狂いもなく墜落すると、また同様、重なるように潰れた。破裂した頭部は、宛ら浜辺で打たれた西瓜^{すいか}のようであった。

酸鼻^{さんび}極まらない光景。

矢張り、飛び降りたのだ。

関わるべきか——幾らか逡巡した後、ビルのガラス戸に手を掛ければ、それは呆気なく開いた。するりと流れ込むように建物の内部に浸入する。

矇^{くら}い。

けれども、フロアを二つも上れば目が慣れた。ぼうと緑色に浮かび上がる非常灯を幾度も傍らに通り過ぎ、無機質なタイル張りの階段を上って行く。

次第に近くなる声。

下卑た嗤^{わら}い声である。何やら愉しい遊びに興じているようであるが、碌な所業でないであろうことは朦朧^{ぼんやり}と想像出来た。

階段には、からりからりとこちらの下駄の音が響いており、屋上にもそれは届いている筈であったが、その屋上にいる声の主は気付いていないようだった。

足早に上る。

からりからり。

薄朧^{うすぐら}い階段。六階から更にその先、屋上には立ち入らぬようにと気持ちばかりのロープが張ってあったが、それは軽々と飛び越えることが出来た。

上り切った先、厚い金属製の扉に取り付き、ぐいと開け放つ。

露わになった屋上には――男が二人、女が三、否四人か。

けれども彼らの立場はと云えば、男二人女三人が見下す側、残った女――少女と評す方が適切か――は見下される側と二つに大別できる。

屋上には明かりが二つ灯っていて存外に明るい。

髪を淡い色に染めた男たちは、ピアスだらけの顔面をこちらに向けて呆けていた。男たちの連れと思しき女三人も、男たちの奥でへたり込んでいる少女もまた、立ち現れた状況の変化に頭が追い付かぬと云った顔でこちらを見ている。

数瞬後、三人の女たちが何やら慌てた様子で内輪揉めを始めた。

――頭も股も緩そうだ。

胸中で吐き捨てるように嘔^{わら}う。

途端、男の一人が女たちに向かって「うるせえぞッ」と喚き、もう一人を伴ってゆらりゆらりと身を揺すりながらこちらに向かって歩いて来る。ゆらゆらとした歩き方はこちらを威嚇しているつもりなのだろうが、生憎、ゴリラの兄弟にしか見えなかった。

眉毛のない不細工な顔が二つ、夜陰の中で半端な明かりを浴び、余計に酷い有様である。宛ら秘境に暮らす少数部族の呪いの面が如

きであつた。見様によつては剽軽で滑稽だ。

さて、連中はどのような遊びに興じるつもりであつたのか——半ば予想は付いていたけれども——三度、目玉に力を込めて、視界を揺らす。

三人の女は猿の人形が如く両手を叩き、嬌声を上げている。

男たちは——奥でへたり込んでいる少女を貪るように凌辱していた。四足の獣がするように幾度も腰を振り、完全に弛緩した少女の身体を持ち上げては舌を這わせ吸い付き、二人で同時に自らを突き入れては、自らを吐き出す。

少女の内腿を伝う血液は、少女が先刻まで純潔であつたことを証していた。

唇の端を上げて、薄く笑ってみせる。挑発ではない。けれども、男たちはそう受け取つたらしい。瞬く間に激昂し、こちらへ駆け出した。

視界の最も奥、腰砕けになつて立てぬ少女はわなわなと口を動かしている。こちらに何かを伝えたいらしい。きつと、助けを求めているのではないのだろう。とつと逃げると、そう云いたいらしい——彼女の潤んだ唇がそう呟いたように見えた。

彼女は幼く見えたけれども、これから己に降り掛かるであろう運命を予想出来ぬ程初心うぶでもあるまい。しかし、それでも尚、他者の心配をするようだ。自分を助けてくれと、泣いて縋すがったりはせぬらしいのである。

それ程、頼りなさげに見えるのだろうか。

前のめりに走る男たちは、尻のポケットから光るものを抜いた。

視界は未だ揺れている。

二つの視界が、僅かなズレを伴つて同時に進行している。

少女は——こちらでは腰を抜かし、そちらでは無残に犯されている。

からり、下駄の音を鳴らした。

それは空間を清めるように響き渡る。

そして刹那——闇夜に糸が走った。

琥珀色に輝く二本の光の糸が、千々に裂かれる筈であったものを縫い止めるように駆け抜け、瞬時、尻を地に着けたままの少女の眼前で停止する。

残光はやがて霧散し、残るは丸い二つの濡れた琥珀石。

今宵は新月。

けれども慥かに、その場には月影が雅な輝きを放っていた。

※

一 続

「――さむ」

五度目である。

九絵ソラは登校の途を、寒さに背を丸めて歩いていった。制服にジヤージと云う昨日の出で立ちに加え、今朝はマフラー、セーター、黒タイツの三者を動員したが、それでも鋭い冷気は容赦なく身を突いた。故に、斜めの機嫌は更にその傾斜を増す。

昨日雨堂が事務所を去った後、二時間掛けてのんびりと彼の食べ残しを摘まんでいたソラに届いたのは「ああ、今日は中止だ。また明日」と云う宵子からの電話であった。虚しい二時間であったと、ウエハースの食べ滓の残った皿を洗いながら肩を落とした。

吐息が白く濁り、そろそろと透き通っては、逃げるように消えて行く。

ソラの学び舎である領条りょうじょう蘭山高校へ近付くにつれて、同窓生の影が徐々に増える。それでも、ソラはひとりで道を行った。

何気なく天を仰ぐ。青く晴れ渡った晩秋の空に白い雲がちらほらと漂い、昨日の雨の名残はすっかりないようであった。――この寒さである。雨雲が残っていれば、或いは雪が降ったかもしれないと思っただ。

ソラには通学を共にする程の友人がいない。とは云っても、譬えばクラスで除け者にされているだとか、そう云ったことはないのだ。ただ、誰とでもそれなりに仲良く、当たり障りのない関係で――それが九絵ソラの立ち位置であった。

ソラの人懐こい剽軽な立ち振る舞いは「調度良い距離感」を築くのに役立った。外観としては、「飄々としていながらも人当たりの良い少女」であり、けれども踏み込まれたくない範囲は誰にも侵させない。自分がマイペースな人間であることは十二分に承知していて、それを変えるつもりも他人を振り回すつもりもなかったが、た

だ他方で、学生生活で妙ないざこざを抱えるのも面倒であったのだ。

ソラの生活の重心は件の事務所にある。しかし、学生生活もきちんと送るようにと云うのが事務所の主である六ノ宮宵子の言葉であり、ソラはそれに従い、領条蘭山に通っているのである。

ならば——と、ソラは事務所の同僚とも云えそうな雨堂のことを考える。

彼も何処か高校に通っている筈であるが、まるで彼の制服姿と云うものを見たことがない。ブレザーであるのか、それとも詰襟であるのか——そのどちらであつても、よく似合いそうだと思つた。

雨堂戒人は一言で云つてしまえば、美形なのである。

小洒落た黒い癖毛、長い睫毛に奥二重、何処かあどけなさの残る顔立ち——はくせき白晢の美少年と云うのが適切な表現だろう。

何より印象的なのはその双眸で——そうぼうそれらは世にも美しい琥珀色をしていた。ソラは琥珀石と云うものを写真でしか見たことがないが、それでも或いは雨堂の眸の方が琥珀石よりも琥珀石らしいのではなからうかと、そんな馬鹿げたことを考えたくなる程、彼の眸は魅惑的な色合いを湛えていた。

姿形の造りだけを云うのであれば——雨堂は慥かに美形ではあるのだけれども——世の中には、彼以上にハンサムな男など掃いて捨てても千切つて投げてまだまだ余る程存在するだろう。それでも、彼に匹敵する程美しい眸の持ち主はそうそういるまいとソラは思う。彼がその気になれば、今ソラの周りを歩いている領条蘭山の女生徒たちに、片端から魅了の呪いを掛けてしまえるに違いない。

そこまで考えて——。

けれども、その呪いはたちどころに消えてしまふだろうと思つた。雨堂には愛想と云うものがまるでない。きつとそう云つた概念そのものを知らぬのだとソラは確信している。表情の変化に乏しく、いつも不機嫌そうで、かと思えば皮肉を込めた笑みをにたりと浮かべたりするのだ。加えて、存外に口数が多いにも拘らず、齒に衣着

せると云うことを知らない。そこいらの女生徒であれば、「ザッソーオンナ雑草女」の一言で腹を立てるか、泣き出すか——孰れにせよ、彼に対する淡い恋慕は瞬く間に露と消えるだろう。

そう考え、「雑草女」と云われた後も、別段いつも通り会話を続けることが出来た自分は何て懐が広いのだろうと、ソラは自己に大きな賛辞を贈った。

気が付くと、眼前に正門が迫っている。門の傍らに直立する体格の良い警備員は、浅黒い顔の中に白い齒を煌めかせて、生徒たちと清々しい挨拶を交わしていた。

予鈴が鳴った。

腕時計に目を遣ると、余りのんびりとしていて良い時刻ではなかった。

ソラは駆け足気味に、門の内側へと滑り込んむ。白い朝陽が頬に差すが、ただ眩しいばかりであった。

「ああ、さむ」

言葉は白く立ち上る。

六度目である。

朝の教室は何やら色めき立っていた。予鈴が鳴った後だと云うこともあって、級友は殆ど自らの席に着いていたが、それでも周囲の席の者たちと忙しく会話を交わしている。皆、眸を輝かせ、わいわいと愉しげであった。

ソラは教室の中央付近に位置する自分の席に向かおうとして、眼前、徐に席を立ったその人物とぶつかった。おもむろ

「うわっと、ごめん。——おはよう、九絵さん」

「あ、どもす。いいんちよ」

優しげに笑んだその少年、にしなせいご西銘成吾はソラのクラス——二年五組のクラス委員長を務めている。西銘は柔らかな眼差しを巡らせて、ちよっとした騒ぎだね、と云った。

「皆、どしたんすか？ 何か面白いことでもあるんですかね」

「あれだね」

西銘は白く細い指先を窓際に向けた。

教室の席は五つで一列が原則で、ただ窓際の列だけは四席で構成されている——筈なのであるが、西銘の指した先には五つ目の席がぼつりと佇んでいた。空席である。

「机、一個多いですね」

「転校生がね、来るんだ」

西銘は目を細めた。微笑んでいるのか、眩しいものを見るような表情である。母親に似たのか、純朴な少女のような顔立ちをしている西銘は、何かに焦がれているようでもあった。

「転校生、ですか」

「今朝会ったんだ」

「会った？」

「うん。何だか立ち往生していたみたいだから、職員室まで案内して来た」

そこまで云うと、「それじゃ」と西銘は足早にその場を去ろうとした。もうすぐ本鈴が鳴る時刻だと云うのに何処へ行くのかと問うと、彼は「手を洗ってくるよ」と恥ずかしげに答えた。何やら氣拙い空気が流れて、ソラはそれを誤魔化すように自分の席に着いた。

十一月も終わりを迎えようという時分である。転校生が来る時期としては随分と中途半端ではないかと、ソラは考えるともなく思った。それこそ、転校時期は冬休み明けを待った三学期初めであると云うのが最も納得出来る展開であって、それが二学期の終わるひと月前だと云うのは、無理矢理予定を割り込ませたようでもうにも慌ただしい。

余程急ぎの事情があったのだろうか。譬えば親の急な転勤であるとか、離れて住む家族に介護が必要になったのであるとか——。ソラは未だ顔も知らぬ転校生の家庭事情について、朦朧ぼんやりと妄想にも似た詮索を頭の中で繰り広げたが、それもじきに鳴った本鈴に掻き消された。

暫くして担任である数学教師が戸を開けて教室に入ってきた。同時、滑り込みで戻った西銘が号令を掛け、一連の朝の挨拶がなされる。結婚してから幾らか太ったその男性教師は、近頃また痩せ始め、女子生徒の間では「奥さんに云われて、ダイエット始めたのかな」などと笑い話の種になっていた。けれども、それは馬鹿にされていると云う訳ではなくて、寧ろ彼は割と女子生徒に人気があった。曰く、切れ長の目が良いらしい。

「えーっと……」

担任は教壇からクラスを見回すと苦笑いを浮かべた。

「もう皆気が付いているみたいだな。うん、今日転校生が来る」

彼は云いながら、黒い表紙の学級日誌を最前列に座る日直当番に手渡した。

「まあ、僕が色々云ったところで始まらないし、兎に角入って貰うことにしようか。――おーい、入ってくれ」

担任が声を掛けて数瞬後、引き戸が開られた。室内がしんと静まり返る。その静寂は級友たちの云い様のない期待感をたっぷりと吸い込んで膨らんで行った。

果たして、ひとりの男子生徒が姿を露わした。メタルフレームの眼鏡を掛けた彼は黒板の前に向かうと白いチョークを手に取り、妙に整った丸い癖字で自らの名前を記した。

転校生は小気味良く手に付いたチョークの粉を払うと、担任の促しに従って教壇の斜め前に立った。途端、級友たちは近場の相手と小声で私語を始める。それは勿論、転校生を正面から見てのことであつた。

西銘は誰とも言葉を交わさず正面を向いている。先刻会ったと云う転校生と視線を交換しているようだ。

ソラもまた、誰とも言葉を交わさずその転校生を見詰めていた。けれども転校生は、ソラとは視線を合わせようとはしなかった。どうやら、頑かたくなにこちらを意識せぬようにしているらしい。ただソラはそんな彼の様子に気を留めることもなく、只管、予想だにしな

った状況に目を見張っていた。

小洒落た黒い癖毛、長い睫毛に奥二重、何処かあどけなさの残る顔立ち——白晳はくせきの美少年と云うのが適切な表現だろう。何より印象的なのはその双眸で——それらは世にも美しい琥珀色をしていた。

「あれ、あれ……？」

ソラの呟きは勢いを増し始めた級友たちの私語に吞まれて消える。担任は騒ぎを制するように両手を翳したが、それでも状況は収まらぬ。特に女子生徒たちは男子生徒の転入を喜んだのか、話し声を高くした。

「はいはい、静かに。今日からクラスの一員になる雨堂だ。皆、宜しくやってくれな」

担任は雨堂の肩を軽く叩き、新たに追加された席を指す。

「雨堂、あそこが君の席だ。少し席は離れているが……西銘」

「はい」

クラス委員長は誠実な声音で応えた。

「彼が委員長の西銘だ。分からないことは取り敢えず彼に聞いてくれな」

雨堂は担任の言葉に一応反応すると、促されるまま与えられた席に着いた。ただ、彼の醸し出す独特の雰囲気のせいなのか、周囲の級友たちは彼に声を掛けあぐねているようであった。

担任はどうか生徒たちの私語を収めると、瑣末な連絡事項を述べ、ホームルームを終えた。

雨堂は一限目が始まるまで、彼の席まで出向いた西銘と何やら話をしていたようであったが、ソラはそれを眺めているだけで席から動かなかった。混乱に縛り付けられていたのである。

「どう云うことなんですか、雨堂さん？」

昼休みの廊下には生徒たちが開いた弁当だの惣菜パンだのの匂いが渦を巻いており、それらが教室から溢れ出した暖房の熱気に温められて、筆舌に尽くし難い異臭へと変貌している。ソラは雨堂を教

室から連れ出すと、購買部に寄って二人分の昼食を揃え、屋上へと向かっていた。

人気のない場所を求めていたのである。寒さが本格的に厳しさを増したこの季節、態々屋上で食事を取ろうなどと云う酔狂な生徒はいまいと、ソラはそう考えたのだった。

四角く螺旋を描く階段を足早に上る。

「引越して来たんだ」

隣を歩く雨堂は眼鏡の奥に眠たげな半眼を作って云った。彼の視線は雄弁で、「ああ、面倒なことになった」と嘆息するその心中が透けて見えたが、ソラは構わず歩みを進めた。そもそも、教室でこちらが声を掛けた際、彼は文句を云うでもなく、それこそ唯々諾々と後を付いて来たのだ。今更「面倒だ」と云う顔をしたところで逃がしてやらないぞ、とソラは思う。昨日は云い出せなかった、二人だけで話があったのだ。

「引越し、すか。どの辺に？」

「ん？ 蘭山一丁目」

一丁目と云えば地名の元となった『蘭山』を少し登った辺りで、慥か大きな屋敷が立ち並ぶ一帯であった筈だ。彼の家庭はそれなりに裕福なのだろう。安いワンルーム暮らしのソラは、隣を歩く少年は一体どんな素敵な生活を送っているのやらと臆気おぼろげに想像した。

「それと――眼鏡、ですか？ 雨堂さん、視力悪くないですよね？」

「あー、伊達だ」

雨堂はすつと眼鏡の縁を触ってみせる。

「オサレ眼鏡すか」

「馬鹿。そうじゃない」

「変装すか？」

問えば、雨堂は何やら身の入らぬ返事をして黙り込んだ。凶星なのだろうか。ただ彼の場合、カラーコンタクトレンズも併用しなければ、余り意味がないのではないかと思った。

「でもウチに転校して来るなら、昨日事務所で云ってくれれば良か

ったじゃないですかー」

「まさか同じクラスになるだなんてな」

「雨堂さん、私が領条蘭山にいるって知ってましたよね？ んじゃ

同じクラスにならなかったら、知らんぷりするつもりだったんすか？ あ、そのオサレ眼鏡、私から隠れるための変装だったんですね

！ ふへへ、そりゃあちよいと甘いつてもんすよ。私、雨堂さんが教室に入って来た途端に見破ってましたからね。――雨堂さん、聞いてますか？」

見遣ると彼は購買で買ったピロシキを齧っていた。歩きながら食べ始めてしまう程に腹が減っていたのだろうか。それとも返事が面倒で、自ら口を塞いだのか。もごもごとピロシキを齧る彼の様は何処か子供染みていて可愛らしく、ソラは意図せず笑ってしまった。雨堂はそれを認めると、不機嫌そうに眉根を寄せた。

それから会話はぱたりと絶え、二人は黙して階段を上った。

間もなく屋上に出ようかと云うところでソラが先行する形になる。背後を行く雨堂と、足音が重なった。彼にズラすつもりはないらしい。ならばと、ソラも足音を重ねたままにしておいた。

無機質なドア――昨今は飛び降りの防止などの理由で屋上と云うスペースは閉め切られていることが多いのであるが、領条蘭山はその例外にあった。屋上への出入りは、下校時間までであれば、原則自由なのである。

ソラは冷たいドアノブに指を絡めた。ずっと、指先が冷える。

その時――耳に届く声。会話の内容までは聞きとれぬが、それでも誰か先客がいたようである。ただ、その場に突っ立っていても始まらないので、ソラは戸を開いた。

広がる屋外の風景に人影が二つ。

こちらを弾かれるように見遣る二人の女子生徒。二人とも二年五組の所属で、ソラや雨堂と同級であると云うことになる。

一方は色の淡い髪にやや強いウェーブを当てた少女で、もう一方は、背中まで伸びた黒髪を二つ括りにした地味な印象の少女であり、

眼鏡を掛けている。

二人は屋上にソラと雨堂が現れると、まずウェーブの少女、それから眼鏡の少女と云う順でその場を後にした。

「えと、町田さん——」

ソラは眼鏡の少女が傍らを通り過ぎる際声を掛けようとしたが、当の本人はそれを拒むかのように速足でその場を去った。

「あの眼鏡——」

眼鏡の少女は雨堂の前の席に座っている町田巴まちだともえと云う生徒だった。

「逢引きか？」

屋上の真ん中に歩み出たソラの背後で、雨堂が後ろ手に戸を閉めながら問うた。彼は最後のひと口となったピロシキを放り込み、林檎ジュースのパックにストローを刺した。フェンスに寄って校庭を眺める雨堂からは、新しい環境に飛び込んだ緊張感だとか不安感は微塵も感じられなかった。呑気な様子でジュースを吸っている。

「女同士でないことはないでしょうが——雨堂さん、そう云うの下衆の勘繰りって云うんすよ。それに、あれはそう云うのじゃないと思います」

ソラは雨堂から少し離れてフェンスに凭れ掛もたかると、購買で買った鮭握りを取り出した。それは雨堂に話すべきか否か、決するのに必要な距離だった。

「私も詳しいところはよく知らないんですけどね。始まりは、いいんちよ……えっと西銘さんと、さっきの森崎冴もりやきさへさんが随分と激しい口論になったと云う話がありましたですね。ひと月くらい前だったかな」

「森崎？——ああ、あのウネウネ」

ウェーブの掛かった森崎の髪を評したのだろうか、雨堂とて他人のことは云えないと思った。

「ええ、はい。それが西銘さんの方が森崎さんに厳しく詰め寄っていたような感じだったと云うんです。西銘さんは普段迎も温厚なものですから、ちょっと話題になったんですよ」

「意外に熱い奴なんだな」

雨堂は感情の読めぬ声でそう云った。午前中の休み時間は専ら西銘と会話していたようであったが、仲良くなったのだろうか、ソラは横目に雨堂を見た。彼は未だ校庭を薄朦朧と眺めていた。

「どうやら、町田さんが森崎さんに嫌がらせをされていたみたいで、西銘さんがそれを咎めたとか。たださっきの様子を見ると、懲りてないみたいですね、森崎さん」

「――下らない」

雨堂は息を吐くように云った。その声は白く濁り、冬空に吞まれて行く。

下らない――それは何に対して向けられた言葉であるのか、ソラには分からなかった。

森崎冨が町田巴に嫌がらせをしている件であろうか。それとも西銘がそれを強く責めた件であろうか。或いは、その全て――一連の流れに対してなのかもしれない。

雨堂は煙草を吹かすように、ふうと細く息を吐いた。彼は今、何を吐き出したのだろう。傍らで眺めていると、彼の仕草にはどれも何かしら意味があるように思えて、目が離せなかった。

「あのですね、雨堂さん」

「んあ？」

雨堂は間の抜けた調子で返事をした。

「えと、今日放課後、事務所に行くんですけど、どうすか？ 一緒に」

これは本題ではない。このようなことを話したいがために雨堂を薄ら寒い屋上へ連れて来た訳ではなかった。けれども、いざとなると中々話し出せぬものであった。

「行かない」

ずるずると、雨堂は飲み切ったジュースのパックから口を離して云った。予想と一字一句違わぬ回答である。

「用があるんだよ」

「そすか」

ソラは応えて押し黙った。

「大体おまえ、昨日も行つたろ？ 何の用事なんだ」

雨堂は漸く校庭から視線を外し、身を翻してフェンスに凭れるとこちらを見遣った。琥珀色の双眸に射抜かれる。ソラはその美しい輝きから、足元の灰色へと視線を逃がした。

「昨日、来なかったんすよ、宵子さん」

「あーなるほど」

雨堂は半ば憐れむように唸った。彼にも経験があるらしい。

「だから、今日は出直しですね」

「御苦労なことだな」

欠伸を噛み殺しながら、彼は更にフェンスへ体重を掛ける。張り替えられたばかりなのか、真新しい金網がぎしと音を立てた。

二人の間を、冷めた風が吹き抜けて行く。スカートの裾がはたみいて、沈黙に響いた。

「あの、ですね。雨堂さん」

今度こそ、と意を決して切り出す。本題を話せと己が急かした。本来であれば、昨日の内に雑談に混ぜて聞いてしまっておきたかったことである。

とは云え、必ず聞かねばならぬと云う性質の話ではなかった。けれども、ソラとしてはどうしても聞きたいと、そう思った。

その願望はただ純粹に好奇心から来るものであつて、それは、ともすれば雨堂戒人にとっては迷惑なことなのかもしれない。

しかしながらソラにしてみれば、彼はある意味では同類であつて、けれども対岸に佇むものであり、また他方で全く異質なものであると云う、近くにいなながら、それでも遠い——非常に気掛かりな存在であつた。

ソラにそのように吹き込んだのは件の六ノ宮宵子ろくのみやよいこであり、彼女から与えられた断片的でありまた核心的でもある雨堂戒人についての話に、ソラは強く惹かれた。

だから、聞くだけ聞いてみよう。若し、彼が厭がるような素振りを見せたなら、その時は潔く引き下がり、素直に謝ろう。そして許されるなら、詳しく聞いてみたい。彼の世界を知りたい。

何故ならそれは、ソラがどう足掻いたところで踏み込めぬ世界であるからだった。

だから、おずおずと尋ねてみる。

「ん？ 今度は何だ」

雨堂の眸は薄らと濡れていて、艶々としていた。今度はそのから逃げずに、彼の視線をじっと捕らえる。

「あの、ですね」

云い淀む。雨堂の表情が、いつになく穏やかであるように思えた。或いは彼は、こちらの質問の内容を既に知っているのかもしれない。ソラは、遂にその言葉を口にした。

「雨堂さんは、未来が視えるのですか？」

一 続々

※

事務所には香ばしい珈琲の匂いが立ち込めている。ソラは鞆から一冊の厚い本を取り出すと、机の上に置いた。古いソファアが、ぎしと音を立てる。

色褪せた茶色い革表紙のその本は、金の印字がなされている通り、その表題を『奇^{あやし}と崩^{くずれ}』と云った。六ノ宮宵子は「早いな、もう読んだのか」と薄い笑みを湛えてソラの向かいに座った。

「いえ、四行で挫折しました。中身が長々とややこしいので、掻い摘んでお話し頂けないかと思ひまして」

ソラが云うと、宵子は呆れたように眉を動かした。

六ノ宮宵子は恐ろしい程美しい女性である。粒子の細かい肌、艶々と靡く黒髪、長い睫毛――吸い込まれそうな程深い黒色を湛えた眸は、絶妙な曲線を描く二重瞼の下でしっとりと濡れている。何処か妖艶で、けれども少女のような幼さ、無邪気さを残したその顔立ちには十六、七の学生だと云っても疑われまい。けれども、彼女は實際のところ二十二歳で――その数字を聞くと、ソラには彼女が随分と大人であるように感じられた。

左目の下、丁度泣き黒子^{ぼくろ}のある辺りを人差指で掻くと、宵子は困ったように笑った。

「あのなあ、ソラ。自分のことなんだから自分で学ばないといけないぞ」

「ですから、宵子さんから聞いて学びます」

「――口八丁だな」

宵子は愉しげに珈琲を啜ると、机に置かれたビスケットに手を伸ばした。

「そうだな……まず、何から話したものか」

どうやら宵子は話してくれる気になったようで、ソラは取り敢えず胸を撫で下ろした。眼前に横たわる辞書のように分厚い本を通読しろと云われても、眩暈めまいがするばかりでページが進まぬのは目に見えていた。

「その本は、崎島源吾さきしまげんごと云うはぐれ者の民俗学者の論文を、さる好事家うずかが製本したものでな。必然、部数は少なく、中々に貴重なものなのだ。中身は崎島氏が調査のため日本全国を巡っていた際、彼が興味を持ったとある事柄についてのものなのだが、それが表題にある通りの『奇と崩』と云う奴だ。崎島氏の言葉を借りるならば、崩とは『肉としての人間の進化形』であり、奇とは『霊としての人間の進化形である』らしい。我々のような人でなし連中は、端的にかつ語呂が良いと云う理由で、自分たちをそう称する。言い出しつpeg誰かは知らん。——この呼称は近畿地方の幾つかの集落で共通して用いられているものらしくてな。崎島氏も長らく近畿地方に滞在して調査を続けたらしい。まあそれも、もう、何十年も昔のことだが」

軽妙な口調で語る宵子の眼差しには、けれども真剣な色が宿り、ソラは自然背筋が伸びた。目の前に置かれたココアのカップに手を伸ばす気も起きない。

「呼称の源についてだが、『奇』は聞いての通り『妖しい』から来ているのはすぐに分かるだろう。ただ、『崩』の源は少々アレでな。——奇の力はな、事情を知らない普通の人間の目にはそれこそ奇跡の業わざとして映る訳で、忌まれるにしろ崇められるにしろ、奇は神秘としての扱いを受けたんだ。ただ、崩は身体能力こそ高いものの神秘性は薄く、結果、化け物だの妖怪だのと——それこそ人になり切れぬ獣染みた存在として、疎まれることとなった。崩は——まあ、これは奇にも当てはまることだが——髪の色や眸の色が普通の人間と大きく異なっている場合も珍しくない。例えばアルビノの赤ん坊などは嘗て鬼子、白子などと呼ばれたが、崩が生まれ、それがひと目で崩だと分かる場合には同じような扱いを受けたらしい。別段、

崩として生まれたからと云って、その人物の人格が悪方向へ決定付けられるようなことはないのだが、昔の人々は妖怪染みた身体能力を有する崩を異物として嫌い、恐れたのだそうで、二度と蘇らぬよう叩き潰し、切り刻んで殺していたのだそうだ。復活を恐れて死体を損壊すると云うのはままたある話だ。――異物であると云う点では奇も崩と同様である筈だが、神秘性を伴う奇を殺すのは畏れ多く、^{うしろめた}背徳い。だから奇は遠ざけられこそすれ、殺されはしなかった。反面、力が強いだけ、或いは足が速いだけの崩ならば、それこそ熊や猪を殺すような感覚だったのかもしれない。人々はその叩き潰された後のモノを称して『崩』と呼び、いつしかその呼び名は未だ生きている者に対しても用いられるようになったらしい」

「私は、その――」

「うん、おまえは崩だ。崎島氏の、或いは私たちの言葉で呼ぶならね」

「崩、すか」

宵子はカップをそっと机に置いた。

「忌まわしい呼称ではあるが、おまえの同類は半ば自虐的に、けれどもそれなりに好んで己をそう呼んでいるよ」

ソラは宵子から目を逸らさなかった。

初めて気が付いたのはいつだっただろう。朦朧^{ぼんやり}と思い返してみる。

あれは――中学一年の頃、預けられていた親戚の家でドアノブを引き抜いてしまった時のことだ。それから、シャープペンシルを握り潰し、携帯電話を親指で貫き――そこに至って、漸く自分がおかしくなったことに気が付いた。

それから一日中、力加減を覚えることに苦心したのを覚えている。華奢^{きゃしゃ}な自分の身体の何処にそんな余分があったのか。理由は分からぬが突然怪力になってしまった自分を恐れながらも、ただ親を亡くした自分を引き取ってくれた親戚に迷惑を掛けまいと必死だったように思う。

誰に云われるまでもなく、怪力のことは他人に云ってはならぬのだと自覚していたが、それでも他人にない力を得たと云うことは、何処か背徳い愉悅を感じさせ、当初はふらふらと夜陰の中を散歩しながら、隠れて鬼や天狗の気分を味わっていた。

そこへ現れたのが六ノ宮宵子であり、孰れ支障を来たすであろう日常生活のことを慮おもんばってか、ソラを引き取ることを申し出てくれた。

親戚一家はどうやらソラの滞在を半ば疎ましく思っていたようである――宵子の騙った肩書きのせいもあるのだろうか――ソラを宵子へ預けると云うことに微塵の抵抗もなかったようだった。その一家の様子は、家庭に受け入れられていたと思っていたソラにしてみれば聊ちやうどかならず衝撃的であつたが、宵子が自分の身体のことを自分よりもよく理解していたことから、ソラは宵子も自分と同類であるのだと確信し、彼女の元へ身を寄せた。けれども、後日、「私におまえのような怪力はないぞ」と云う事実を明かされ、ソラは啞然としたのだった。

あれは驚いたと、ソラは腹の底で笑う。けれども、宵子も同類であると云うのはあくまでソラの想像であつたのだから、文句も云えぬし、ソラ自身、そのことは諒解している。

宵子と出会ったのが中学三年の終わりであり、あれからもう半年が経つ。ここに至ってされた話は未だ理解の枠に納まりきらぬところもあったが、けれども己の怪力は、九絵ソラと云う人物が『崩』と云う人でなしであることに起因しているのだと云うことについては理解が及んでいて、今はそれで十分であるように思えた。

ただ、六ノ宮宵子は何なのだろう。事情に詳しい彼女は、それでも普通の人間なのだろうか。いや、それはあるまい。

「あの、宵子さんは崩じゃないんすよね？」

「お！　自分が崩だのなんだのと云われても戸惑っていないようだな」

そう云って宵子は笑い――

「私は奇だよ」

と答えた。

奇と崩の話をされたところで、何処か予想の付いていた回答だった。「我々人でなし」と云った彼女が崩でないのなら、もう奇であると云う答えしか残ってはいまい。

自分が思わずドアノブを引き抜いてしまうような怪力持ちであることから、崩が「肉としての人間の進化形である」と云うのは朦朧ぼんやりと分かる。けれども、奇が「霊としての人間の進化形である」と云うのは何やら想像がし辛かった。幽体離脱でも出来るのか、それとも念写や透視が出来るのか。そのようなことを宵子に問うと「出来る奴もいるかもなあ。私は会ったことがないけれど」と割と真面目に応えるので、ソラはやや狼狽ろうばいした。そんなソラを見ると、宵子は愉しげに笑んで「いや、流石に幽体離脱はないかもなあ」と付け加えた。

「えと、じゃあ、宵子さんはどんなことが出来るんすか？　って、

訊いちやっても良いんですかね？」

「ん？　ああ、そうだな。私の力は大したものじゃない。見ても詰まらないぞ？」

「でも、見てみたいです」

食い下がると宵子は、「私の力をそう直接知りたがったのはおまえが初めてだ」と呟くように云った。

「仕方がない。特別だぞ？　言い触らしたりはなしだ。それから若し万が一、他の奇に会うようなことがあっても、力のことを根掘り葉掘り聞いてはいけないぞ」

ソラが神妙に頷いてみせると、宵子はすっと右腕を右へ伸ばした。一瞬何が起こったのか分からなかった。

——六ノ宮宵子の右腕、その肘から先が消失したのである。

皿のようになったソラの目を見て、宵子は声を上げて笑った。

「そんな顔をしてくれるなら、見せた甲斐があったと云うものだ。おまえには見えないだろうがな。ここにはポケットの入口があるんだ。私はそこかしこ、至るところにポケットの入り口を作って、そ

こにものを仕舞っておける。ただ、それだけの詰まらない力だ。私は片付けが苦手だから、神様とやらが生まれ付きこの力を授けてくれたのかもしれないが——我ながら、本当に下らない力だと思う」

短く嘆息すると、「もっと面白い力を持った小僧がいるんだが、今はちよつとお遣いの最中なんだ」と云った。けれども、眼前で起こった超常現象に驚愕していたソラは、その一言を聞き取る余裕を持ち合わせていなかった。

霊としての人間の進化形であるとは、即ち——俗っぽく表現するならば——超能力とも云うべき力を持つ人間のことなのである。ただ、宵子が見せたそれはソラが思っていた超能力とは随分と印象が違っていて、ソラは素直に驚愕の虜^{とりこ}となっていた。

「どうだ？　話が前後したが、これが奇と云う人種だ。超能力者、と云う陳腐な言葉で呼ぶよりは洒落た呼称だろう？　そして、おまえが崩。加減を誤れば軽々ドアノブを引き抜いてしまうような存在だ。崩は成長期に覚醒することが多いようだな。身体が出来上がっても脳が追い付かないためらしいが。——だから、実際に問題を起こすケースも少なくない。まあ問題を起こす起こさぬと云う話をすれば奇も同じ土俵で話をせねばならないのかもしれないが、奇はごく幼い頃に力の仕組みに気付くことが多いせいか、過失的な事故が少ないのだ。誤って携帯電話を握り潰すようなこともない。私も子供の頃、自分の力を誰に教わるでもなくどう云った性質のものか理解していたからな。本能的に知って生まれて来ているのかもしれない。乳の吸い方を知らない赤ん坊がいないように」

宵子はそこで言葉を切った。

西陽が差し込み、彼女の美しい顔を黄昏色^{たそがれ}に染める。

自分が人間としての枠を幾らかはみ出しているのは実感していたけれども、眼前に座る六ノ宮宵子と云う女性はその上を云っていると思った。

そのような内心を見透かされたのか——宵子は「奇と崩に序列はないよ。それに私からすれば、おまえの剛力の方が羨ましい」と言

葉を紡いだ。

ソラとて「どちらが優れているか」と言う話をするつもりはない。けれども、単純に目の前の麗人を凄いと思った。

何もない筈の虚空に、彼女はポケットの入り口を作ることが出来るのだと云う。突拍子もない冗談に聞こえるが、眼前でそれを見せ付けられては否定のしようもない。慥かに、奇跡の業なのだ。

それは彼女に云わせてみれば詰まらない力かもしれないが、それでも六ノ宮宵子の立ち位置が、如何に訓練したところで決して辿り着けぬ特殊な場所であることには間違いない。彼女は、常人の理解がまるで届かぬ場所に佇んでいる。

「奇と崩——私たちは人間の異種だ。ただ、生物学的には普通の人間とさして変わらないのだそうだ。まあ、崩は身体が並はずれて強靱であると云う違いはあれども、奇などはどうしておかしな力が備わっているのか、その理由は分からない。それに、奇の性質も崩の性質も遺伝するようなものではないそうだ。だから——異種と云うよりは、突然変異なのかな。まあ、奇と崩にはまだまだ謎が多い」

宵子は云った。

人外の身体能力を有する崩。

ささやかな奇跡の業を振るう奇。

二つの単語が頭蓋の内側をぐるぐると回っていた。宵子に引き取られてから半年がたった今、漸く自分の正体——その一つの回答が得られたのだ。

淡く、溜息が出た。

「でも、その——」

云い掛けたところで、宵子はこちらが何を云いたいのか諒解したようである。

「ああ、我々は自分たちの異才のことを隠している。私がおまえを引き取ったのはそう云う経緯もあるんだ。おまえ、他の連中の間で話題になっていたぞ？ 夜な夜な飛び回って遊んでいる馬鹿がいるからどうにかしろって」

それを聞いて、ソラはバツの悪そうな表情を浮かべた。

「やっぱり秘密なんですね」

「うん。はみ出し者は日陰者さ。日向に出ても、良いことなんて何もない。ウンザリするばかりだから詳しい説明は省くけれどね、人間にとっても、奇と崩にとっても碌なことにならない。だから、バレないように隠す。おまえも私が隠してしまった。まあ、日陰者の暗黙のルールと云う奴だ」

宵子は息を吐くように笑った。

それから宵子は色々な話をしてくれたように思うが、ソラはそれを朦朧^{ぼんやり}と、何処か上の空で聞いていた。

奇と崩——表の世界に立ち現れぬ人外の者たち。

ソラはこの時初めて、自分が異世界に踏み込んだのと自覚した。

私は崩——怪力持ちの人でなしなのだ。

※

一 続々々

「何を朦朧ぼんやりしているんだ？」

ココアの甘い匂いに包まれながら忘我の境に入っていたソラは、宵子の一言で現実へと引き戻された。転寝から叩き起こされたように頭がぼうとしている。本当に寝入ってしまったのかもしれない。

「いえ、ちょっと以前のことを思い出していました。その、私が崩だって初めて云われた時の――」

「ああ。崎島氏の本の概要を語って聞かせろだのと、おまえが厚かましいことを云ったあの日か。私もよく覚えてるぞ。長々と語ってやったからな」

宵子は事務所奥、白いシャツにブルージーンズと云う出で立ちで、年季の入った木製のデスクに浅く腰掛けている。「所長」の二文字が印字された白い三角錐がどうにも間抜けであるが、それを拵えた本人は甚く気に入っているようだ。ソラは腰掛けているソファアの上で大きく伸びをし、身を振よじった。ソファアがぎしと鳴る。

「まあ、それは良い。本題に入ろうじゃないか」

宵子は緩慢な動作でソラの向かいに座ると机の上に新聞紙を投げ出した。見遣れば、赤ペンが入れてある。

――中高校生連続殺傷事件。

そうあった。

「これは――」

「このところニュースで騒いでいるから、知っているだろう？」

「ええ、知ってはいますが――今度のお仕事はこれですか？」

問えば、そうだと宵子は首肯した。

中高校生連続殺傷事件――西蘭市昭和町で西蘭市立第一高校に通う男子高校生二人が立て続けに撲殺されたことに始まるこの事件は、先日、西蘭市蘭山町にて薫風女学院に通う女子中学生が瀕死の重傷

を負わされたことによって、一度に世間の注目を浴びた。

被害者は皆夜遊びの習慣があり、彼らが狙われたのは深夜一人になったところであった。名門である薫風女学院の生徒が夜遊びをしていた結果事件に遭ったと云う事実は、それなりに衝撃的であったらしい。ソラにしてみても、薫風女学院には良家の令嬢が通う花園としての印象しかない。

「犯人探し——すか？」

「うん。面倒だが断れない依頼だね。ただ、別に犯人を捕まえる必要はない」

「捕まえる必要はない？」

宵子は静かに頷く。

「犯人の素情さえ分かれば、後はあちらで好きにするそうだが
あちらで好きにする——初め、その意味がよく分からなかった。
けれども——。

「それはその、つまり——」

「まあ、復讐したいと云うことだろう。だから、警察よりも早く犯人を上げて欲しいと云うことだ」

「復讐、すか」

ソラは胸中に淡く闇が差すのを感じた。

「復讐は正当な動機だ。——この話は以前した筈だが？」

「そうですね」

ソラは短く答えると、すつと瞼を閉じた。

「はい、大丈夫です。やれます」

「そうか。別に重く感じる必要はない。おまえは事件を調査する——それだけだ。話を進めるぞ？」

ソラは真剣な面持ちで頷いた。すると宵子は一度ソファを立ち、デスクからファイルを持って、再び先程の位置に戻った。

「これが資料だ。一応渡しておく——まあ、報道された内容と余り変わりが無いんだが、ひとつ」

宵子は右の人差指を立てた。

「現場には犯人が残したと思われる遺留品があつてな——ヒーローものの面、万華鏡、飴細工」

「何だかお祭りのお土産みたいすね」

「ああ、蘭山大社の秋祭りで売られていたものらしい」

ソラは宵子の話を聞きながら、机の上に投げ出された資料を手に取り、漫然と捲る。視線を紙面に滑らせるも、目新しい情報は余りないようであった。

「遺留品は、矢張り犯人からのメッセージなのでしょうか」

「そう考えるのが妥当なところだが——或いは、何らかの儀式なのかもしれん」

宵子は云って、足を組み替えた。

「儀式？」

「ああ、つまりな。秋祭りで売られていたものを現場に残して行く——そのこと自体に犯人が何か意味を見出しているのではないかと、まあ、そう云うことだ」

「なるほど——」

呟くように云って、人差指で顎を触る。

「分かりました。では取り敢えず、初めは現場を回ってみることにします」

ソラが資料を鞆に仕舞うと、宵子は「話はまだもう少しあるんだ」とソラの動作を制するように云った。ソラがそのまま事務所を辞してしまふと思ったのだろう。

宵子はシャツの胸ポケットから写真を数枚取り出すと、机に並べた。

手に取って見てみる。

そこには酷く顔色の悪い少年少女が映っていた。皆、まるで幾日も睡眠を取っていないかのような虚ろな目をしている。

「これは——」

「事件現場付近で補導されたらしい」

明らかに正常でない少年少女の有様に、ソラはひとつ思い付いた

ことを口にする。

「薬物、ですか？」

けれども、宵子はそれを否定した。

「夜中現場付近を徘徊していたらしいのだが——尿検査は陰性だったそうだ。それに補導されたのはこれまで一切非行歴のない真面目な学生ばかりだと云う。調べてみても、薬物使用の事実は認められなかったらしい。ただ、中には幻覚・幻聴に悩まされている者もあるみたいでね。彼らは知り合いが務める病院に入院しているんだが原因は分からず——まるで呪いだよ」

「その、徘徊学生が今回の事件に関係あると？」

「分かん。ただ、現場に行くなら気を付けろと云う話だ」

ソラは宵子の言葉に短く「分かりました」と答えた。

暫しの沈黙——。

事件の話はそれ以上なかった。けれどもひとつ、また別の話があった。

「——訊いたのか？」

宵子おもむろが徐に口を開いた。

その言葉が何を意味するのか、分からぬ筈もない。そもそも、彼へ訊いてみると云ったのは彼女なのである。ソラは宵子の間に静かに頷いた。

「で、あいつは何と云っていた」

「いえ、その、ただ——ああ、視えるよ、と」

「それで？」

「それだけです」

答えると、宵子は呆れたように眉根を寄せた。

「他には何も訊かなかったのか？」

「はい、まあ。奇の力について、根掘り葉掘り訊くのは如何なものかと思ひまして」

「あいつが話して良いと云ったんだぞ。これから仕事と一緒にすることもあるだろう。知っておかなければ色々面倒じゃないか」

——未来永劫そんな機会はない。

雨堂の言葉が蘇る。

彼の方から、自分と仕事をしたがることはないだろうとソラは思う。けれども、譬えば宵子に命じられたのなら、彼は自分と仕事を共にするだろうか。それとも、断固として拒否するだろうか。

「全く、世話の焼ける奴だ」

宵子は髪を掻き上げると、「私で分かる範囲は教えてやるから、細かいところはきちんと言っておけ」と云った。

「戒人は未来が視える。あいつが云うには、眼球の後ろに力を込めるようにすると、現実と未来が重なって視えるのだそうだ。自在にオン、オフの切り替えが出来るのだな。ただ——」

一端言葉を切って、宵子は腕を組んだ。

「あいつは、自分の未来だけは視ることが出来ないらしい」

そう云った宵子は視線を窓の外に放った。

「それともうひとつ」

宵子は続ける。

「あいつは自分で視た未来を、自分の手で変えることが出来る。譬えば、目の前で子供が転ぶ未来を視たとして、あいつがその子を抱えてやるなりすれば、その子供は転ばずに済む訳だ。けれども、あいつが何もしなければ子供は必ず転ぶ。大仰な云い方をすれば——」

「雨堂さんだけが、その子を救える？」

「そうだ」

宵子は短く肯定した。

未来を視ることが出来る少年は、更に未来を変える力まであるのだと云う。けれども、未来を知ることが出来るのならば、それを変えることが出来ると云うのは至極当たり前のことのように思えた。

「ただ、未来を変えるにはあいつが直接的に変えたい未来に強く干渉する必要があるのだと云う。今の子供の譬えだと、子供に転ばないよう注意を促す程度では駄目で、少なくともその子供の手を取って支えてやるなりしなければならぬのだそうだ」

それは少し面倒だ。未来を変えるためには、未来の「事柄」に「直接」「接触」しなければならない。それに、ソラにはひとつ気掛かりなことがあった。

「あの、雨堂さんは自分の未来は視えないんすよね？ それじゃあ、自分の未来は変えられないと云うことですか？」

その間に、宵子は暫し沈黙した。

「私はね、あいつには未来がないんじゃないかと思うんだ」

一瞬、どう云うことなのか分からなかった。

「——『未来を視て、それを変えることが出来る』と云うあいつの未来が視えるのだとすれば、それは未来を変えることが出来ないと云うことだろう？ あいつに未来が視えると云うことは、少なくともあいつが視ている範囲では未来が確定していると云うことになる。残酷な話だがね。ただ、あいつはそれをあいつの手で変えることが出来る。ここでその変革者の未来が定まっていれば、それは未来を変えることにはならない。『視えた未来に干渉する』と云う未来の事実を辿っているにすぎないんだ。若しそうなのだとすれば、あいつには『未来を変える自分の未来』が視える筈で、つまりそれが視えないと云うことは、あいつはいつでも選択肢の上に立つことが出来る——確定した未来の上で自由であると云うことなんだろうと、ね。気障ったらしい云い方をすれば、あいつの前にはルールがない。私はそう思うんだ。戒人から見れば私たちには『未来』がある。けれどもあいつにとっては、この一秒一秒の先、現在いまと云う過去の連続の先端、その地点が見通せるギリギリの位置なんだ。自由だが、迎も不自由にあいつは感じているだろうな」

宵子はそこでひと息吐くと、「まあ、奇の力など、解析したところで不毛なだけなんだが」と漏らした。

再び、沈黙——ソラは黙っていた。雨堂戒人の力の説明を受けても、ソラはそこに大きく疑問を差し挟むことはない。

雨堂は未来を視ることが出来る。
未来を変えることが出来る。

彼もまた、如何に訓練したところで決して辿り着けぬ特殊な場所にいる。常人の理解がまるで届かぬ場所に佇んでいる。

未来視の異才——理解しようとしたところで、それは叶わない。出来ることと云えば、精々想像することくらいのものだ。

彼は、雨堂戒人は——彼だけの場所から一体何を眺めているのだろうか。

先刻屋上にて、彼は何を見下ろしていたのだろうか。

彼のあの琥珀色の眸は、何を見ているのだろうか。

あの蜜のような色合いの双眸には、どのような景色が映っているのだろうか。

ソラはぼうとそんなことを考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4860z/>

彼の者の眸は何を見るか 第一話 『霽月の趣』

2011年12月22日02時45分発行